

# しゅんぎくのは種期と収量性について

## 1 試験のねらい

しゅんぎくは栽培期間が短かく、春及び秋を中心に年間を通じ栽培されるようになってきたが、栽培期間や生育状況はは種期や栽培様式によって大きく異なる。したがって、生産の安定をはかるためには、は種期に応じた生育特性を充分は握しておくことが重要と考えられるため昭和 55～56 年の 2 か年にわたりは種期と生育、収量の関係について栽培様式を組み合わせ検討した。

## 2 試験方法

品種は中葉しゅんぎくを用い、昭和 55 年 7 月 20 日から 56 年 6 月 20 日まで 10～30 日間隔に 18 回は種し、それぞれのは種期に応じハウス（トンネルの有無）、トンネル及び露地を組み合わせた。規模は 1 区 4 m<sup>2</sup>、1 区制で、80 cm 幅のベットに a 当たり 820 g の種子を散播した。なお、トンネルはポリフィルムを用いて、昼温 30℃ 以下で管理を行った。

## 3 試験結果及び考察

は種後草丈が 15 cm を越えるまでに要した日数は、1 月 20 日は種のハウスの栽培が 66 日で最も長かったのに対し、6 月 1 日～8 月 20 日は種の露地と 4 月 10 日は種のトンネル栽培では 28～31 日と短かく、高温条件下の栽培ほど短縮された。また、生育はは種期や栽培様式によって異なり、高温下の栽培ほど葉長は短かく、分枝数も少なく、節間は長くなる傾向が認められたが、このような葉長、分枝数及び節間長に及ぼす影響は温度条件だけでなく、土壌水分の多少も大きく影響するものと思われる。特に、1～2 月は種のハウス＋トンネル栽培では日照不足の影響もうけ株は軟弱徒長し、は種期間では品質が最も劣る結果となり、冬期の被覆栽培における温度管理及び日照不足対策の重要性がうかがわれた。

各は種期における収穫期は図のとおりで、ハウス＋トンネル栽培では供試した各は種期とも収穫可能であったが、ハウスの栽培では 11 月 20 日及び 12 月 20 日、トンネル栽培は 10 月 20 日～3 月 1 日、露地栽培では 10 月 20 日以降のは種で寒さのため発芽後枯死し、この期間の実用的な栽培は困難と判断された。なお、9 月 10 日は種の露地栽培では生育中期から葉枯れが発生し始め、10 月 1 日は種では草丈が 17 cm に達した時点で、寒害を受け枯れ始めた。収量は 1 株重の優れた 8 月 20 日、9 月 10 日及び 4 月 20 日は種の露地栽培で多収となったが、収穫期間中（草丈 15～30 cm）の抽だいば春～夏のは種期でも全く認められなかった。

## 4 成果の要約

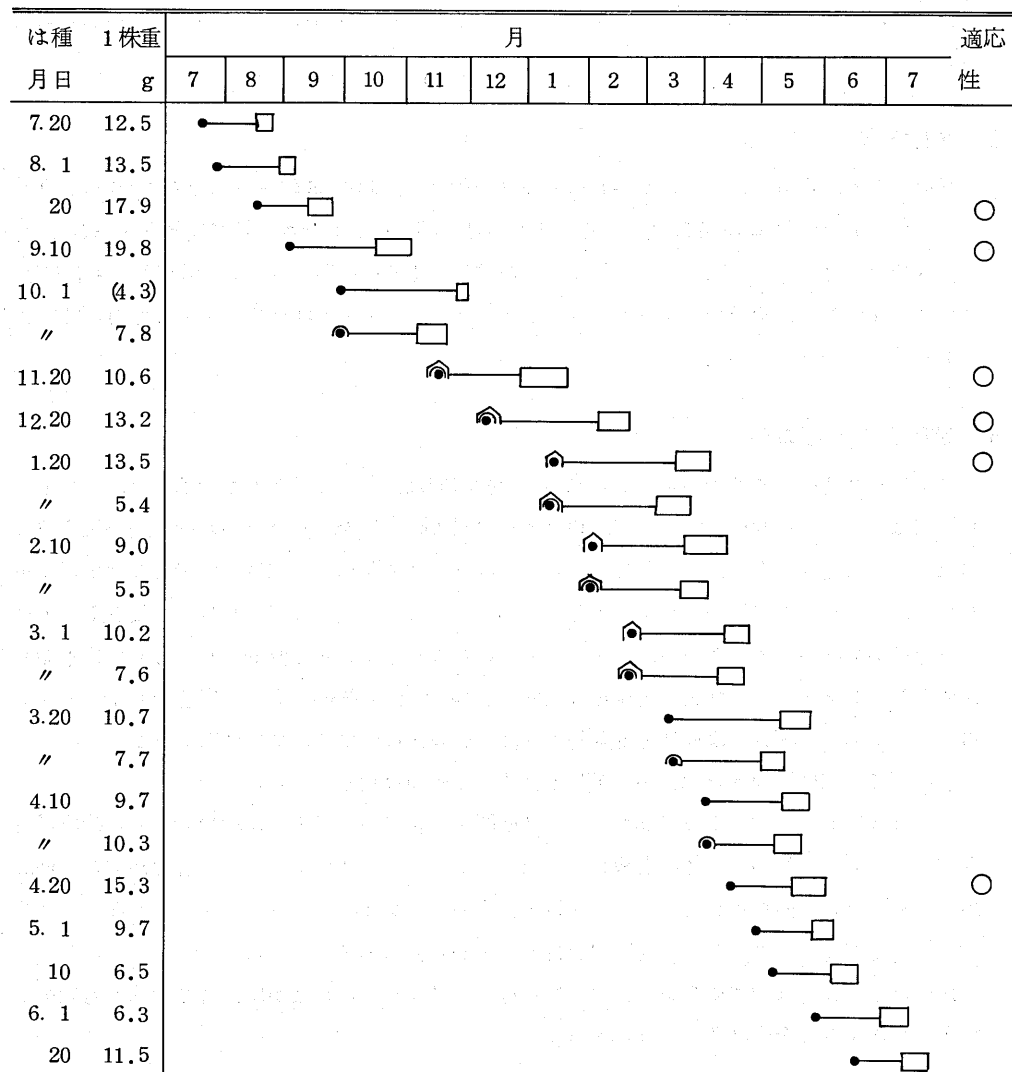
当地方におけるしゅんぎくのは種期と生育、収量及び収穫期の関係を明らかにするため、栽培様式を組み合わせ検討した結果、は種期に応じた栽培様式を組み合わせることによってほぼ

周年，栽培が可能と考えられた。しかし，安定した生育，収量を得るためにはハウス＋トンネル栽培では11月中旬，ハウス栽培では1月中旬以降のは種が適当で，また，トンネル栽培は3月中旬～10月上旬，露地栽培では3月下旬～9月中旬のは種が適すると思われた。

※  
(担当者 野菜部 長 修，福田 咲)

※現鹿沼分場

図－1 は種期及び栽培様式と1株重，収穫期の関係



注.

● — □

は種 収穫期 (草丈15~30 cm)

栽培様式: ● 露地 ● トンネル ● ハウス ● ハウス＋トンネル

○:最適は種期